

被災地交流事業報告書

日時	平成 27 年 9 月 20 日（日）～ 21 日（月）		
参加者	児童・生徒 42 名	保護者 37 名	合計 79 名
主な日程	9 月 20 日（日）	閑上の記憶、大川小学校、講話、	
	9 月 21 日（月）	山木屋敬老会、浪江仮設住宅交流	



閑上の記憶

かつて 5,000 人が住んでいたその町は壊滅的な被害を受けそのほとんどが更地になっています。「だれも津波がここまで来るなんて考えもしなかった。」閑上中学校の生徒 14 名が犠牲になったが、その中の一人が当時中学一年生だった丹野公太君。最後に目撃されたのは中学校に向かって一生懸命走っている姿だったそうです。「日本にいる限り災害がこないということはない。いつも常に災害の前という気持ちを持たなくてはならない」と丹野くんのお母さんは言われました。



それから、今年度で解体が決まった閑上中学校へと向かいました。変わり果てた学校には津波がここまで来たという爪跡がくっきりと残っており、窓や壁、玄関やその付近のガードレール、2時46分で止まった時計など、どれもその当時のことが分かる遺物でした。しかし、このまま残しておくことが出来なくなりました。私たちはその最後の証人となったわけです。しっかりとここで見たこと、聞いたこと、感じたことを伝えていかななくてはならないと思います。

大川小学校跡

児童 74 名、教師 10 名が亡くなった大川小学校。その凄惨な現場に立った時人は言葉を失います。その時、人々はどのような想いでこの世を去ったのか、絶望と悲しみが同時に押し寄せてまいります。当時はたくさんの家々が建ち並んでいたこの地区も今は見渡す限り何もなく、ただひっそりと当時の面影を残す残骸と化した大川小学校が建っているのみです。

亡くなった児童一人一人の名前が刻まれた慰霊碑や地域の子どもからお年寄りまで亡くなった全ての人の名前が彫られた慰霊碑に向かい、全員が献花と共に合掌し、ご冥福を祈りました。



そこに駆けつけてくださった千葉元校長先生からお言葉をいただきました。

千葉先生は「一番怖いのは風化すること。東北にもこれまで 30 年周期で津波は起こっていました。しかしなぜこれほどまで甚大な被害になってしまったのか。それは防災教育が徹底されていなかったことが原因であると考えます。地域や学校、先生によって防災に対する意識の差があった。その差がここ一番でてしまった。」そして最後に「今あることがあたり前と思わないでください。明日があるとは限らない」と今を一生懸命生きることの大切さを伝えてくださいました。体験をされた先生の言葉だからこそ説得力があり心に染みました。

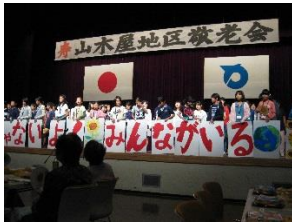
福島交流

山木屋地区敬老会（川俣町中央公民館）

川俣町に避難している山木屋地区の老人会婦人会 200 名のみなさまと交流。「ひまわり」「Smile」の 2 曲を披露。「Smile」では手話も披露しました。歌声が会場に響き渡り、一体となってうちわを振ってくれる姿に会場のみんが涙しました。婦人会の皆さんが、一人一人と握手でお見送りして下さり感動のひとつときでありました。

浪江地区仮設住宅訪問（福島市南矢野目）

仮設で暮らす被災者の皆さんとの交流「ひまわり」「Smile」の合唱。震災当時の炊き出しをそのまま再現して下さり、丸い塩おにぎり、豚汁、きゅうりの丸かじり、果物のほかに、かき氷、わた菓子など子どもたちのためにおもてなしをしてくださいました。



参加者感想

- ・「今日、あたり前に生活していることをあたり前だと思わないでください」との言葉が心に響きました。
- ・「災害後なんてないいつも災害前なのですよ」「生きていてくれるだけで親孝行」との言葉が心に沁みました。
- ・いつか大きくなって子どもができたならこの震災のことを子どもたちに伝えていきたい。
- ・この大震災の現実を忘れないことがずっと繋がっていることになると感じました。
- ・自分の命を大切にしたい。何か人の役にたつことを考えたい。
- ・大川小学校のTVを観ていた時は「山に逃げれば良かったのに」と思っていたのですが、あの場所に立ってみると低学年の子どもたちがいる中でそれは難しく聞くのと実際に見るのでは違うのだと感じました。
- ・何回もTVで観ていましたが校庭の中に入ると想像を絶するものでした。
- ・実際に自分の足でその場に立った時の気持ちは本当に言葉に出来ないものでした。涙が止まりませんでした。
- ・「いま福井にいて出来ること」それを子どもと共に考える機会となりとても良かった。
- ・私は、今日のことを通して現地に行ってみないとわからないことはたくさんあると学びました。ニュースやドキュメンタリー番組などの報道だけでは、どんどん風化され忘れ去られてしまう記憶です。現地に行き、被災された方の話を聞くことで、もし自分がその時そこにいたらどんな行動をしていたら、と考えることで忘れられない記憶になりました。
- ・このような大きな被害になったのは大地震だったから、大津波だったからというだけではなく、ここにはこないだろうとの油断から大きな被害になったこと、日本に住むということはいつ災害が起こってもおかしくない状況で過ごしているということを学びました。今ある問題を見直し、危機感をもって暮らしていくことが大切だと感じました。
- ・もっと学びたかったら、もっと遊びたかったら。亡くなった子どもたちを思うと涙が止まりません。
- ・山木屋地区敬老会では、全員が心を一つに思いを込めてひまわりと Smile を歌いました。会場の皆さんもみんな泣いてくれました。私も泣きながら一生懸命歌いました。みんなの思いが伝わったと思いました。学校のみんなにも被災地のことを伝えたいです。
- ・私たちに出来ることは、被災地のことを忘れないこと、あたり前に明日が来ると思わず一日一日を大切に生きてゆくこと、人を思い合うこと、感謝の思いが溢れました。助け合いながら前向きに頑張っておられる仮設住宅の皆様と手を取りあって泣きあいました。私たちは、決して被災地のことを忘れません。この日のことも一生忘れません。人を思い合う心、命の尊さ、心が繋がったと感じた感謝と感動の二日間でした。